

ビッグデータ分析支援

予測システム 車部品・半導体に提案

ワイ・ディ・シー

ワイ・ディ・シー（東京都府中市、山本 智明社長・042・333・6200）は、工場にIoT（モノのインターネット）を導入して取得したビッグデータ（大量データ）を素早く分析し、結果を予測するシステムを

開発した。人工知能（AI）を取り入れ、生産設備の異常や製品の不具合の防止に役立つ。IoTに関心の高い、自動車部品や半導体メーカーなどに提案する。3日から提供を始める。

ワイ・ディ・シーは車部品や半導体生産のデータ解析を支援する基盤「YDC SONAR」の7代目として、新たなシステムを

開発した。生産設備のセンサーから取得する時系列データと、実績データをクラウドのサーバー上にビッグデータとして蓄え、自動的に関連付ける。100万件のデータを、約7秒で取得する高速の検索能力を持つ。

機械学習や深層学習といったAIの機能を利用して、温度や圧力などの各条件に応じた加工結果を、過去のデ

ータに基づき判断したり予測したりする。これにより品質検査の時間を短縮できるといった効果があるという。設備の自動制御機能を活用し、故障の防止などにもつながる。

「YDC SONAR」は1995年に発売。累計108社・156工場などに納入してきた。今後は需要に応じ、約半年ごとに機能を改善する計画。従来のデータ活用基盤は、取得したデータから自動的に図やグラフを生成し見える化する機能にとどまっていた。